

前近代の上町台地

大阪歴史博物館館長 脇田 修 氏

日時：平成18年6月6日（水）

会場：大阪歴史博物館

はじめに

大坂の地形を見ると、現在では開発によってわからなくなっているが、東は深江、西は船場という地名が示すように、水郷があって、人々の当然のこととして上町台地に住むようになった。

したがって原始時代では森之宮遺跡があり、なによりも大化改新ののち孝徳天皇が営まれた長豊崎宮もこの近くの台地上にあった。これは長らく不明になっていたが、太平洋戦争後、大阪市立大学名誉教授山根徳太郎先生の調査により発見され、現在、法円坂に大極殿跡が公園化され、基壇が復元されている。

中世でも、この台地の北と南が開けた。台地を北へ下りた大川岸付近は、渡辺といわれた土地で、ここを渡辺党という武士団が本拠としていた。渡辺党は一字の名を名乗り、源頼光に仕えて大江山の鬼退治の供もした渡辺綱や、源平争乱のさい宇治橋の戦いで功名をあげた渡辺競らの勇士を出した。

南では四天王寺があり、聖徳太子発願による建立と云え、名刺として聞こえている。なかでもこの西門は極楽の東門に通じているといわれ、とくに彼岸の日に真西に沈む太陽を拝む「日想観」をすると、極楽往生ができるとされた。近くの夕陽ヶ丘はそれに因んだもので、平安時代にこの地に憧れた公家の藤原家隆が移り住んだので、その家隆塚も残っている。そのため大阪周辺では、彼岸とくにその中日には四天王寺へ参ることが広くおこなわれていた私も子供の頃、父に連れられて参詣し、人の多かったことと、亀の池など見たことを覚えている。またこの石の鳥居は、寺院にある鳥居で珍しいが、さまざまな奇瑞を伝えている。これにすぎると足腰が立つといい、芸能では小栗判官が腰車でやってきて救われたとか、安寿と厨子王の厨子王もここで救われたという筋になっている。四天王寺境内には多くの身障者がいたのは、それと関係があろう。なかでも、この西門で高安長者の息子俊徳丸が父と再会して家へ帰った逸話は、能楽「弱法師」となり、その帰路には俊徳道の名が付いても近鉄の駅名にもなっている。なおここから西へ丘を降ったところが合邦

ヶ辻（逢坂）で、浄瑠璃・歌舞伎の名作「摂州合邦辻」の舞台となっている。

この西門前には、中世後期「七千間在所」（大乘院寺社雑事記）ができた。人口数万になるから、当時としては大都市である。そして宝市とか浜市といわれた市も立った。もちろん経済活動もあり、なかでも天王寺苧座は春苧つまりの麻の原料を越後へ買い付けにしていた。おそらくこの周辺で麻織物が作られていたのであろう。

また台地東側の深江は、菅笠の産地として、よく知られた。先の「弱法師」に「笠の段」があり、舞台上で笠をくるきくると廻して投げるのが見せ場になっている。近くの放出は「はなてん」と呼ばれているが、これは中世では近衛家領であり、河内瀧に面して「はなちで」といわれた別宅があり、それがなまって「はなてん」となった。往時は風光明媚な水郷であったのだろう。

しかし台地によって遮られた水は、たびたび水害を起こした。これは現在でも水禍におそわれる程であるから、かつては酷かったであろう。そのため近世中期、中甚兵衛の努力により大和川の付け替えがなされ、国分付近から西へ向かい、堺と住吉の間に大阪湾に注ぐようになった。それまでは本流は生駒山脈の麓を北上し、鴻池新田付近で西流して、京橋で淀川と合して、大川となり、大坂市中へ入った。この付け替えによって、台地東側の湿地帯の状況はかなり改善され、旧大和側筋には多くの新田も開けた。ただ新大和川の吐き出す土砂によって、堺港が浅くなる影響をうけた。

ついでながら大阪市域は、船場も、船の場とあるように水郷であった。とくにその西側はほとんど造成地で、市岡・泉尾など海へかけて新田をつくられたのであった。また阪急沿線で駅名にも残る秦禅寺は、今は小さくなっているが、室町時代は幕府の庇護をうけた大寺院で、大阪の北部に領地をもっていた。その寺領目録には「堀田之内角田」とあるが、それは阪急のある梅田角田町の地名の初見であり、地元には埋田では字が悪いと、天神さんの梅に因んで梅田としたとの言い伝えがあったが、これを裏付けている。また堂島も小さい御堂のあったことを記している。これを見ても大阪の平地部は湿地帯で、この土地を開発していったといえる。

さて、室町時代の明応八年（1499）、本願寺八世蓮如が「生玉庄内小坂」に隠居所を設けた。これは小坂となっているが、大坂の初見である。生玉は大坂の地主神という神社であるが、当時は大坂城内付近にあり、秀吉の大阪城建設にあたって移転させられた。この荘園内の地名が大坂となっていったまのである。「家一もなく畠ばかりの地」で「虎狼の住処なり」とある。上町台地には家はなく、高台で畠があるだけであった。ただ虎狼がいたわけではない。これは蓮如の言い癖で、越前吉崎道場の時も同じようにいつているが、ここも三国港に近い場所で、開けていた。むしろ蓮如はすぐれた眼でもって、要地に寺を構えたのであって、さすがに大教団の組織者であると思わせる。これによって大坂という地名も生まれたが、その後、山科本願寺が比叡山との抗争の中で、大坂に移転して、大坂本願寺が生まれた。なおこれを石山本願寺というのは、通称であって、蓮如が寺を営んだ際、地中から難波宮の礎石と思われるが、建築素材になる石が出て、仏の加護と喜んだという

逸話があり、石山と呼んだというが、石山は近江に著名な所があり、これを寺名とするのではないと思う。実際、本願寺では大坂本願寺と称していた。

大坂本願寺には寺内町十町ができ、台地上を清水谷辺まで寺域となったと考えられている。寺内町は寺院の境内として町ができることで、他の宗派では門前町をつくるが、一向宗は肉食妻帯を認めているから、境内に俗人がいてもよかったからであろう。また周辺には一向宗の寺内町ができた。河内では八尾・久宝寺・富田林、和泉貝塚、摂津富田、大和今井がそれで、現在は大阪周辺の都市として繁栄している。なお尼崎には一向宗とともに日蓮宗本興寺の寺内町ができた。

近世の大坂

織田信長と十年に及ぶ戦闘ののち、本願寺は大坂を退去して、紀伊に去り、のち東西に分離して京都へ移った。そして本能寺の変後、秀吉は「五畿内の廉目能所」として、ここに本拠を置いた。その城の石垣は、現大阪城の地下にあるが、壮大な城であり、その南には台地上に武家屋敷が並んだ。細川邸は玉造にあり、ガラシャ夫人逝去の地として史跡になっているが、天王寺まで屋敷が並んだといわれる。先日、現天守閣の西を掘ったが、七、八メートル下に豊臣期の石垣を見いだしている。それは野面積みで、太平の世になってつくった徳川大阪城の石垣の方が立派であるが、天下人秀吉の權威をかけて作った城であった。また台地の南に上町寺町や生玉寺町ができ、大川を隔てた天満にも北に寺町がおかれ、●城の防衛線となった。ただ大坂では一向宗の強大な勢力を恐れて、これを寺町にいれず、市内に散在させている。たとえば南北御堂がそれを示している。なおこの寺町には誓願寺の西鶴、法妙寺の近松、円珠庵の契沖など、歴史的人物の墓所があるのを訪ねるのもよいであろう。そして町人らの居住地が船場であった。

大坂の陣では、上町台地は両軍対決の場となり、豊臣方では真田幸村が真田山に陣を布き、徳川家康は茶臼山に本陣を置いた。戦後、徳川氏は豊臣大坂城を地中に埋め、新たに城を造ったが、現在目にするのはも、この徳川大坂城である。この総費用は年間約四〇万石、十年で約四〇〇万石と推計しているが、当時の年間総年貢収納高約一千万石として、その約四パーセントを注ぎ込んだから、大坂はこれによって復興を早めたといえる。

そして一七世紀後半にはいわゆる元禄時代となった。周辺農村は都市近郊の農家として野菜などをつくり、天王寺な蕪・玉造黒門越瓜・勝間南瓜などが聞こえた。また北は稲作と菜種作、南は綿作によって繁栄した。そしてこの発展を支えに、大坂は天下の台所と繁栄した。この頃上町台地上はほぼ幕府の役所などで占められていた。